

平成30年6月14日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16678

研究課題名(和文) 福永武彦における文化史的位相の研究

研究課題名(英文) A study of Fukunaga takehiko in japanese cultural history

研究代表者

西田 一豊 (Nishida, kazutoyo)

千葉大学・大学院人文科学研究院・特任研究員

研究者番号：00571621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究事業では福永武彦を文化史中で捉え直す作業を行った。結果として、福永武彦と戦後の雑誌を中心とするメディア史、または文化史との関連として以下のことが判明した。福永武彦は1956年に加田伶太郎として探偵小説を発表するが、そこには当時の探偵小説ブームを背景とし、新たな週刊雑誌の創刊など活字メディアの隆盛の中で、新しい書き手として要望されたものであった。また小説の精読を通じて、福永武彦のロマン主義的要素を解明し、論文にまとめた。さらに未発表の資料調査や書簡の調査を通じて、小説が作り上げられる過程が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research mainly looks at Fukunaga Takehiko from a historical perspective in Japanese culture, and reveals an association between Fukunaga Takehiko and history of mainly on magazine media or cultural history. In 1956, Fukunaga Takehiko wrote the detective story as Kada Reitarou, this reason was that publishing company and magazine requested as a new novelist. There was a boom of detective novels and publication of a new weekly magazine in a background. In addition, I applied the method of close reading to Fukunaga Takehiko's novels, I elucidated an element of the Romanticism of Fukunaga Takehiko's novels. I summarized it in two articles. Furthermore, I researched some unpublished documents and letters that Fukunaga Takehiko wrote. It reveals a process when novels were built up.

研究分野：日本近代文学

キーワード：福永武彦 日本近代文学 昭和史 メディア研究 出版史

1. 研究開始当初の背景

福永武彦のテキスト群及び作家の文学史における位相について、これまでの先行する研究では、そのテキスト群の内容に牽引され多くが紋切り型の見解を繰り返してきた。すなわち「愛・孤独・死」と言った言葉のイメージがそれである。また福永自身がフランス文学者であったことから、日本の近代文学との具体的な接続点が看過されてきた。そうした先行する研究言説に対し、本研究はそのテキスト群を詳細に検討することから、福永武彦の文学的営為とはどのようなものであったのか明らかにする研究を行っている。

それは具体的には個別のテキストの検証といった作業になるが、こうした作業を通じて、これまで宙づりにされてきた「戦後文学史」の中における福永武彦の位相を探る目的もあった。事実、福永武彦という作家の文学史における記述は、文壇登場時の「マチネ・ポエティック」の一員というものに限られる場合が多い。しかしそのテキストから詳細に検証すれば、福永の文学的な位相とはロマン主義の系譜のそれであり、それは日本においては戦前の「四季」や「日本浪漫派」の戦後における継承を意味すると考えられる。

またジョイスやプルーストに代表される20世紀小説の技術的影響やフランスのヌーボー・ロマンとの関わりが注目されるが、福永の伝記的事実に即して言うならば、1960年代以降こうしたフランスの小説技術の日本に於ける実験と福永テキストの特徴は影を潜め、それに代わり日本の土俗の民俗に根ざす表象がテキストに表れ始める。そこには「日本」という文脈の中で作家として生きる福永の姿が読み取られるはずである。

こうした作家活動の原点を知りうる史料として近年「日記」の公開、未発表史料の発掘が行われている。また戦後商業的に大きく成長した文学ジャーナリズムの中で福永自身も単に「孤高の作家」として存在していたのではなく、加田伶太郎のペンネームで探偵小説を書き、また映画「モスラ」の原作を分担執筆するなど、戦後の活字メディアの中で果たした役割は看過することが出来ない。

こうした大衆小説や中間小説といった従来の福永武彦の小説のイメージとは大きく懸け離れた仕事を再検討することで、時代と伴に変遷する流行作家としての福永と、自身のオリジナルなテーマを追究する福永の様式を見極め、総合的に作家福永武彦を検証する。ここに、単に文学史へと収斂しない時代史・文化史構築に対する福永文学研究の可能性が潜在していると考えた。

2. 研究の目的

本研究は作家福永武彦の文学的営為を総合的かつ立体的に検証するものである。特に福永の作家としての活動期に当たる昭和 20

年代から 40 年代の文化潮流と雑誌を中心とする活字メディアの変遷を視野に入れながら、テキストの生産と流通そして消費の面を重視し、福永文学の散逸している史料の収集を通じて、戦後の文化史の中における福永武彦の位相を解明することを目的とした。特に戦後期のメディア乱立期にあり作家として生きた福永武彦の文学的営為を、これまでの文芸誌掲載小説を中心とする小説研究ではなく、大衆誌にまで調査を広げ、福永武彦の総合的な作家像の構築を目的としている。

また福永武彦の個別のテキストから離れ、昭和 10 年代から戦後期にかけてのロマン主義的ないしは抒情をモチーフとするような小説の検討も目的とした。さらにパーソナルヒストリーとしてテキストを検証するために作家その人に着目し、蔵書・日記・創作メモ・未発表史料等を調査・発掘することでテキストへの影響関係ならびにテキスト生産の現場に立ち会うことで時代史への接続を果たそうと考えた。

3. 研究の方法

本研究事業では研究目的を達成するために以下のような方法を取った。

福永武彦の書簡の調査として山梨県立文学館、北海道立文学館、神奈川近代文学館、日本近代文学館等を訪れ調査を行う。また北海道立文学館には福永の原稿・日記等多岐にわたる史料が寄託所蔵されていたために、これらの調査も行った。

国立国会図書館に所蔵されている、『福永武彦全集』未収録の文献調査を行った。特に加田伶太郎に関する文献はこれまで詳細に調査されてきていないという経緯があったため、探偵小説雑誌、中間小説雑誌、新聞等の精査を行った。

福永武彦の小説「死後」「伝説」「風土」といった小説の精読を通じ、得られた見解を学術論文という形で発表し公開した。これらは福永武彦テキストにまつわる叙情性あるいは土俗的なロマン主義を解明するために行った。

福永武彦のパーソナルヒストリーを通じて、テキスト生成を検討するという目的のため、福永生前の関係者への聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

上記の本研究事業の目的に沿って得られた研究成果について、以下年度ごとに記述する。

まず平成 27 年度は福永武彦蔵書および散逸史料の調査として、北海道立文学館へ赴き調査を行った。北海道文学館では、当館に寄託されてある福永武彦関連史料を閲覧・調査し、これまで明らかにされていなかった史料の存在を確認した。福永武彦の小説に関する

る自筆メモや構想ノート、また日記や手帳類の膨大な史料が寄託されており、史料の重要性を確認した。また福永武彦とメディアとの関連について、主に国立国会図書館に赴き「加田伶太郎」名義で書かれた推理小説とその発表されたメディア環境について調査を行った。この結果、「加田伶太郎」名義で、『福永武彦全集』に未収録の「トンネル」(「読売新聞」昭和34年9月13日)、「某月某日」(「小説新潮」昭和36年11月号)という文章の存在が明らかとなった。また「近影」(「別冊小説新潮」昭和35年7月号)とされる「加田伶太郎」の雑誌掲載写真も確認された。さらに「加田伶太郎」名義が福永武彦であると明らかになった時期について、これまでは作者の言及しかなかったものが、「毎日新聞」昭和31年8月4日の記事で加田伶太郎が覆面作家であるとの記述が存在していることが判明した。

以上の調査は、これまで明らかにされていなかった史料の調査で得られた研究成果である。また、同時に福永武彦の戦後の雑誌メディアにおける役割を解明するために『小説新潮』『エラリー・クイーン・ミステリ・マガジン』という二誌の調査を行った。『小説新潮』が探偵小説ブームを背景に福永武彦を松本清張とセットで売り出したこと、また『エラリー・クイーン・ミステリ・マガジン』では「E.Q.M.M. 短篇探偵小説 日本コンテスト」の銜委員を務め探偵小説ブームの牽引者の一人であったことも明らかとなった。上記の調査結果を2015年11月22日に行われた「福永武彦研究会」でワークショップを行い報告した。

またロマン主義的なテキスト読解作業の結果を、「古里」の系譜 福永武彦「死後」および「伝説」として論文にまとめ、「日本文学と故郷／郷土」千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書に発表した。

平成28年度は神奈川近代文学館、山梨県立文学館、日本近代文学館といった公立の資料館・記念館へ赴き福永武彦の直筆書簡史料の調査を行った。これは研究の目的にあった「散逸史料」の調査に基づくもので、各文学館に所蔵されている書簡史料を調査し、その現状を確認するとともに、広く出版されているものではない書簡史料から福永武彦のテキスト生成に関連する項目・個人史がテキストに与える要素として調査した。調査過程では多くの書簡史料に目を通したが、特に長篇小説『死の島』のテキスト生成を考える上で重要となると考える書簡が発見されることが研究成果となる。

また、福永武彦と出版関係者との具体的なやりとりについても書簡を通じて知ることができた。福永武彦と同時代の文化状況との関連を探るために、福永武彦の『愛の試み』に関して同時代の諸テキストとの比較を行

った。『愛の試み』が執筆された当時、女性・青年を対象とした「生き方講座」ないしは「人生指南」を行う書籍が多数出版されており、『愛の試み』もまたそうした書籍の一つであること、そしてそうした流行の産物でありながら福永武彦独自の見解などが見られることが明らかとなった。

また福永武彦の最初の長編小説である『風土』については登場人物の一人である桂昌三を中心に三重化された反復構造を持つ小説であること、および『風土』が橋川文三『日本浪漫主義批判序説』で指摘しているようなロマン主義小説であるとの見解を論文「福永武彦『風土』論 帰郷とロマン主義」にまとめ『千葉大学人文社会科学部研究』第34号に掲載した。

平成29年度は実施計画最終年度にあたり、これまでの調査の継続とそのとりまとめの作業を行うことになった。平成28年度からの継続調査として福永武彦と雑誌メディアとの相関関係の解明を目的とした初出史料の取集にあたった。具体的には『福永武彦全集』(新潮社)に未収録の文献調査として国立国会図書館、神奈川近代文学館に赴き調査を行った。小説を中心に初出掲載誌を丹念に調査し、また全集未収録となった童話「猫の太郎」などの収集を行った。特に、加田伶太郎名義での探偵小説、および『愛の試み』としてまとめられる随筆の初出掲載誌を『小説新潮』『文芸』といった雑誌によって確認し、タイトルの変遷を含めた出版状況を、雑誌広告などを利用して確認した。こうした同時代の活字メディアの中に於ける福永武彦の位相、あるいはそのテキストの役割といったものを、具体的な史料収集、史料調査を通じて検討することができたことは、本研究事業の成果である。

また福永武彦生前の関係者からの聞き取り調査を行うため、福永武彦の限定出版物を取り扱ったプライベート・プレスの関係者の方にお話を伺った。出版までのいきさつや出版状況、また福永武彦をとりまく人間関係など、限定出版の計画当初の作家を取り巻く状況について詳しい事情を知ることができた。同様に、「福永武彦研究会」で催された福永武彦の生前の関係者の方による講演会等へ赴き、直接お話を伺う機会を得たことは本研究事業の成果であるといえよう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)
西田一豊、「福永武彦『風土』論 帰郷とロマン主義」、千葉大学人文社会科学部研究、査読無、34巻、2017、13-24

西田一豊、「古里」の系譜 福永武彦「死

後」および「伝説」,「日本文学と故郷／郷土」千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書、査読無、第 297 集、2016、32-44

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 一豊 (NISHIDA Kazutoyo)

千葉大学・大学院人文科学研究所・特任研究員

研究者番号：00571621